

Title	土族語(モンゴル語)における接尾辞-nggeについて
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 1 p.1-p.27
Issue Date	1990-01-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79452">https://hdl.handle.net/11094/79452</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 土族語（モンゴル語）における接尾辞 *-ngge* について

角 道 正 佳

## On the Suffix *-ngge* in the Monguor Language

KAKUDO Masayoshi

Monguor language is said to have a singular suffix *-ngge* (*-ge*). Close examination shows, however, that this suffix is added not only to nouns but also to pronouns, proper nouns, verbs, adjectives, adverbs, postpositions and so on in various meanings. It is sometimes added even to plural nouns. The occurrence of *-ngge* added to nouns is low in verse than in prose.

This paper aims to show that one of the main functions of this suffix is to mark the noun in its first appearance. In some texts where many new nouns appear in sequence, there is a tendency that only determined nouns have this suffix. When speaker, topic and theme changes, or when speaker reaffirms the noun which has already appeared in the previous discourse, *-ngge* is added to the noun. In some texts, *-ngge* is added to the same word repeatedly. The usage of *-ngge* may vary from story-teller to story-teller in the tale of same motif.

### 0. はじめに

土族語と保安語には、他のモンゴル諸語にはない *-ngge* (あるいは *-ge*) という接尾辞が存在することが、Тодаева (1973: 43) によって報告されているが、この接尾辞の機能については単数を表すという簡単な記述がなされているにすぎない。しかし、テキストを読んでいくと、とうてい単数という概念では説明できない例に数多く出くわす。極端な場合は明らかに複数を表す概念にこの接尾辞が付いていることすらある。土族語の記述としては最も新しい照那斯圖にも、単数を表すという記述しか見あたらない。土族語、保安語にはもちろん複数を表す接尾辞も存在するが、使用頻度としては今問題にしている接尾辞よりはるかに少ない。複数が全て複数接尾辞を伴っているのでは

ないのと同様に、単数が全てこの接尾辞を伴って現れるわけではない。数という概念は、動詞の人称変化や形容詞の名詞への一致等の存在しない言語においては名詞にのみ関与的であると思われるにもかかわらず、副詞や後置詞にさえもこの単数を表すとされる接尾辞が添加しうる。

以上のようなことから考えて、この接尾辞は単数などというような単純な機能ではなく、全く違った機能を有するものと考えなければならない。ではいったいどういう機能なのか、以下まず、従来の記述を示し、検討した資料について述べ、各品詞に -ngge が付いた具体例、-ngge と格語尾との前後関係、意味上の分類、複数についた例、文体差、談話構造、同じモチーフを表す話におけるバリエーション等の面からの考察を行う。

## 1. 従来の記述

土族語の記述としては、de Smedt et Mostaert (1964) をまず取り上げなければならないであろう。彼らの記述しているのは Narin gol 方言であるが、殆ど -ge という形式のものばかりであって、-ngge という形式のものは少ない。この点がまず注目すべき点である。Тодаева の記述は Xalci gol 方言のものであるが、母音語幹には -ngge、子音語幹には -ge が付くとされている。Narin gol と Xalci gol の中間の方言を記述した Schröder の資料でも基本的には Xalci gol 方言と同じである<sup>1)</sup>。de Smedt et Mostaert の記述には副詞に付いた例しかないが、これが方言差によるものなのか、文体差によるものなのか明かでない。談話を記述したものがないので、検討のしようがない。-ge を取り去った形式が単独で使用可能な話が数多くあるが、これらの語を『土漢対照詞彙』でひくと、大体は -ngge が付いた形が掲載されているので、副詞を際だたせる機能を有する形式が殆ど常に付いたままの形で用いられるようになったものと思われる。しかし中には axaa-ngge 「少し」のように -ngge を取り去った形式が単独では使用不可能と思われる語もある。

de Smedt et Mostaert (1964) の挙げている例は次のとおりである。表記の簡略化の方法については角道 (1987a) を参照されたい。( ) は『土漢対照詞彙』の表記を表す。

§ 55 副詞一般 dali-ge (daliinge) 「同じような」、pugilii-ge (pugiliinge) 「完全な」、sdzaluu-ge (szaliunge) 「知的に」、sEEng-ge (sainge)、sEExang-ge (saihange) 「良く」、mUU-ge、mUU-ngge (maunge) 「悪く」、ts'i xuEEemor-ni aring-ge SUU. (qi hoimorni aring xuu.) 「おまえは部屋の地面を清潔に掃け。」、daGmu-ge kilie-wa. (dagmunge kilewa.) 「詳しく言った。」、

§ 62, 2° -xong-ge, Andz'ii-xong-ge (anjiihong+) 「どこを」、dooro-xong-ge (doorohong ge) 「下を」、ndEE-xong-ge noGs'dz'i- (ndeehongge nogji-) 「ここを通る」、bu durguni dz'iooro-xong-ge re-ya. (bu durguni joorohungge (i) reya.) 「昼食の間に来た。」、Gadaxong-ge xErgi- (ghadahongge he/argi-) 「外を散歩する」

§ 69 量を表す副詞, kidi-ngge, kidixaange-ge (kidExaange-ge) (kidihaange) 「いくら」、axaangge 「少し」、yAma-xaangge 「少しでも、多少なりとも」、ntaGaangge 「これと同じくらい」、taGaangge 「それと同じくらい」、ts'ioong-ge (qoonge), ts'iooquangge (qoogonge) 「少し」、olong-

ge「多く」

Schröder (1970) は、-nggE, -gE (-nggi, -gi) については、xara-nggE「常に黒い」という語について形容詞の継続、習慣を表す (p. 113 注4) という説明および、sira-nggE「黄色いもの」、tsiGan-gE「白いもの」、kuguo-nggE「青いもの」について、-ngge が形容詞から名詞を派生する接尾辞であること、さらに -gE (-gi) が副詞的な意味を表すこともある (p. 119 注126) という記述をしているにすぎない。

Тодаева (1973: 43-44) は前述のごとく単数を表すとして記述していない。形態については、互助方言では母音語幹に -ngge, 子音語幹に -ge, 民話方言では -ge (-gi) が付くという説明がある。Тодаева には互助、民話の両方言のテキストが掲載されているが、民話方言のテキスト中には -ge (-gi) が付いた語が一語も見あたらない。民話方言のテキストは他には存在しないので、この方言について今問題にしている接尾辞の用法についての考察をすることはできない。したがって、以下検討するのは全て互助方言の用法である。

Тодаева の記述には他の記述に見られない貴重な情報がある。それはこの接尾辞が固定した位置を持たないという記述である。あるときは語幹に従属し、あるときは再帰あるいは人称語尾を伴った格語尾に従属する。すなわち、語幹 + ngge + (格語尾 + (再帰／人称語尾)) または語幹 + (格語尾 + (再帰／人称語尾)) + ngge の両方の語順があるという指摘である。しかしこの両者の意味上の違いについては何の説明もない。

Тодаева はさらにこの接尾辞が数字の「一」を表す nige が縮約したものと説明している。単数を表すという説明はここに由来するものであろう。Тодаева (1973: 129, 133) では Fulan nura 方言では -nengge, -delaangge (-dangge) のように副動詞にも -ngge が付くと説明している。しかし Xalci gol 方言にも副動詞に付く例が見られる。

照那斯圖 (1981:17-18) ではこの接尾辞が数字の「一」を表す nige が縮約したものであるという説明と「名詞の単数形」を表すという説明があるのみである。

保安語については Тодаева (1964: 22-23) に -ngge (-ge) が「名詞の単数形」を表すという記述がある。テキスト中には -ge が付く語ばかりであるが、第一話「鼠ともぐら」では一語2回、第二話「ジェメゲンデン」では十語24回出現する。第二話の用法は土族語のものとは少し異なるようである<sup>2)</sup>。

布和、劉照雄 (1982) にはこの接尾辞に関する記述はない。

## 2. 資料

土族語を記述したもののうちで、テキストが掲載されている Schröder (1959, 1970, 1980) 及び Тодаева (1973)(これらを順に VM I, VM II, GR, T と略記する) を検討する。GR は2450行までに限定する。出典を表す略号については第7節を参照<sup>3)</sup>。

VM I, VM II, GR は互助方言の下位方言である Xalci gol と Narin gol 方言の中間の方言を話す話者たちからの記録である。T は互助方言、民話方言の両方言からの記録であるが、実際には

民話方言を記したテキストには今問題にしている接尾辞が一度も現れない。互助方言のテキストは大部分が Xalci gol 方言のものである。したがって、今検討の対象にできるのは Xalci gol 方言及びそれに非常に近い方言に限られることになる<sup>4)</sup>。

### 3. 品 詞

-ngge が単に単数を表すというのであれば、性、数、格の一致という現象のない土族語では名詞にのみこの接尾辞が付くはずであるが、実際には様々の品詞に付きうる。

#### 人称代名詞

te- ne-ngge udZe-n seeGan ada-m ii-gun- a. (TⅢ2: 220, 25-26)  
 te 対 uje- 非 saihan ada-終末 形未 A  
 彼 を 見ても 美しく なれない。

他に「自分」に付いている例が (GR 1105, 1131), 「おまえの」に付いている例が (GR 1373) に見られる。

#### 指示代名詞

ts'i tie-ni-ngge aw- a re. (GR 1087)  
 qi te 対 awu-分 (i)re-  
 おまえは それを 買って 来い。

他に「この」という指示代名詞の限定用法に付いている例が (TⅢ3: 231, 17) に見られる。

#### 固有名詞

##### 地名

s'dz'i tSawu glong- ge darla-gu rEguo ge-dz'i (GR 156)  
 darla-形未 gi-結  
 中央 ゲロン を 誕生させなければならない と、

ゲセル叙事詩の舞台を表す地名である「ゲロン」には繰り返し -ngge が付いている。

##### 人名

nima duAndZewua-ngge udz'i- dz'i-a. (GR 2152)  
 uje- 終過 A  
 ニマ・ ドァンジェウを 見た。

他に (GR 2162) に見られる。いずれも初出ではなく、易者の占いに現れたときの文脈で用いられている。

#### 形容詞

##### 限定的

[tSiGaang-ge yaGa] -la dzela-wa. (TⅡ: 189, 4)  
 qighaan i/yagha 造  
 白い 茶碗を 置いた。

述語的

tSi	Sge	dendergii-ngge	ii. (TⅢ2: 216, 1)
qi	shge	dendirgii	I
おまえは	非常に	愚か	だ。

他に (TⅢ2: 215, 35)

形容詞→名詞

boGuon	-di	noo-dza	kuGuo-ngge	sgE-n-	i. (GR 1153)
boghun	与	nau-仮	kugo	sgE-	終現 I
低いところ	を	見ると	青いものが	見える。	

形動詞

-gu

ts'imu	s'ila-gu-ni-ngge	yi-wa. (GR 294)
qimu	xiila-形未	終過
あなたに	尋ねることが	あります。

他に (GR 1166, 1392, 1649, 1650, 2230) に例があり, -gu-ni-ngge の形のものが (GR 1874, 1875), -gu-nggE yi-dza の形のものが (GR 679) に見られる。

-dz'in (> dz'ing)

So	-nE	nieS-dz'ing-ge	li	sgee-n-	i. (GR 219)
xa/uu	属	nesi-形現	(I)ii	sge-終現	I
鳥	が	飛ぶのが		見えない。	

-san (> sang)

aadie	li	beese-sang-ge: (TⅢ2: 218, 10)
aadee	(I)ii	beesi-形過
お爺さんは		喜ばないで

この例は一例しか見あたらない。

副動詞

-dz'i

uGuo-ya	ge-dz'i-ngge	bi	kilie. (GR 699)
ugho- 意	gi-結	bii	kile-
与え よう と			言うな。

他に (GR 812), (GR 1845), (GR 2151) に例が見られる。

-n (> ng)

mali-ng-gE	die	s'dz'i. (GR 179)
非	(i)de-	xji-
急いで	食べに	行け。

他に (GR 889) に例がある。

-la

mini	xuenuo	ffurongla-la-ngge	kuri. (GR 2081)
muni	hoino	furongla-	目 kuri-
私の	後を	保護し	に 来い。

なお (GR 2107) にはほとんど同じ文で -ngge が付いていない文がある。

-dela

nige nise	kuedz'ie-dela-ngge	mbongge	Guo. (GR 2208)
nige	kuija-	限界	ugho-
衣類が	足りる	まで	報酬を くれ。

他に (GR 2229) に例がある。

副詞

量

ide-dZi	tSadi-gulaa	tSigi-ra-naa	oluong-ge	dZuungla-dZi	ii-gun- a.
(i)de-結	qadi-	qigi 位再	ulon	結	形未 A
食べて	満腹すると	耳 に	たくさん	隠した。	

(T III 1: 209, 28)

wats'ienda-ngge 「たくさん」という語彙に -ngge が付いた例が (GR 929) に見られる。

程度

s'UerGuol	derE	moo	xue-ngge	bou-dz'- i. (GR 729)
	dire	mau	hoi	bau- 終過 I
占い	に	大凶と		出た。

付帯状況

ts'i xuodzEng-ge	bi	s'dz'i. (GR 931)
qi hooz/sin	bii	xji-
空で		行くな。

結果

ndigE	madi	Sge-ngge	doodzElie	so- dz'i-a. (GR 1993)
ndige	madu	shge		sau-終過A
卵	のように	大きく	重なりあって	い た。

様態

sexan	sexang-ge	kilie-di-Guo. (GR 268)
saihan	saihange	kile- 結 ugho-
正直に		言って ください。

さらに diSe-nggge 「詳しく」 (GR 1207), gurdEn-xang-ge 「早く」 (GR 1076, 1081, 1789), araGsangge 「早く」 (GR 1481) という例がある。

yang 「また」

dz'iangdz'ur	yang-ge	soG-	gu	duAndoG-ge-i.	(GR 1059)
	yang	s(za)gha-	形未	dondog	I
	また	尋ね	る	仕事だ。	

他に (GR 2034)

後置詞

ts'i	nda	Sdoro-ngge	s'i-lGa.	(GR 1227)
qi	ndaa	tudor	xji-	使
おまえは	私を	中へ		入らせてください。

他に tada-ngge 「ところ」 (GR 1045)。この二例のみである。

madu

副詞的

badzar	madu-ngge	bose-Ga-	m(T II: 191, 35)
bazar	madu	bos(il) gha-	終末
町	のように	建てる。	

他に (T II: 191, 15), (GR 808, 809, 811, 1020, 1023, 1032, 1910, 2221)

述語的

nudu-ni	ffulaan	Gal	made-ngge-wa.	(GR 1510)
nudu	fulaan	ghal	madu	A
目は	赤い	火	のよう	だ。

他に (GR 1511, 1701, 1779, 1981, 2000, 2154, 2167, 2168, 2189, 2190)

tigi

副詞的

tigi-ngge	mburE-waga	so-dz'i-gun-	a.	(GR 1924)
tigii		sau-	結 形未 A	
そのように	姿を変えて		いた。	

述語的

soo-dzan	urong	tigiyi-ngge-i.	(GR 1782)
sau-	形過	urong	tigii I
住んだ	所は	このよう	だ。

他に (GR 774, 1372, 1718, 1999), また made ts'igi-ngge の形式の例が (GR 1999) に見られる。



#### 疑問詞

niudur kAng-gE re-wu? (GR 808)

niudur ken (i)re-

今日 誰が 来たか。

他に (TⅢ1: 210, 1), (TⅢ2: 214, 19), (TⅢ2: 215, 27-28) に例がある。

このように見てくると、ほとんどすべての品詞に -ngge という接尾辞が付くことがわかる。むしろ -ngge が付かない場合を探した方が手っとり早いとさえ思われる。付かない場合と考えられるのは、動詞の終止形、命令形、意志形の後、文末助詞の後、否定辞の後ぐらいである。副動詞については、決定的なことはいえないが、分離、仮定副動詞に付いた例は見あたらない。

#### 4. 意味上の分類

同じ品詞でも様々な用法があるので、意味的な観点からも -ngge が各種のものに付いていることを示しておく必要がある。

##### 対比

Sge duAndoG-ge nimba, mula duAndoG-ge bs'ia. (GR 1056)

shge dondog nimbaa mulaa dondog b/puxii

大きな こと だ、 小さな こと ではない。

ただし、全ての対比の用法に -ngge が付くわけではない。

Cf. taraGua nige udzi-dz'i-a, su -na-ngge-da udz'i-dz'i-a. (GR 1898)

tara/og nige uqi- 終過A suu 再 uqi- 終過A

トラックを 飲んだ 乳 も 飲んだ。

##### 限定

##### 指示代名詞の限定的用法

[ne-ngge uge] -ni tene sgil-de-ni buu-dZi ii-gun- a. (TⅢ3: 231, 17)

ne ugo tenu sgil 与 bau-結 形未 A

この ことばは 彼の 心 に 降り た(留まった)。

さらに (GR 1569, 1973)

##### 形容詞

[tSiGaang-ge yaGa] -la dzela-wa. (TⅡ: 189, 4)

qighaan i/yagha 造

白い 茶碗を 置いた。

##### 名詞の属格

[dZindZi Suu -ne-ngge yuudal] -a. (TⅡ: 190, 2)

jinji xu/au 属 yaudal A

孔雀 の 足取り だ。

さらに (TⅢ5: 236, 9)

述語 (コブラの前)

名詞

ne	bulee	dZobne	dzeliuu	bulee-ngge. (TⅢ3: 231, 17-18)
ne	bula/ii	job/d	jaliu	bula/ii
この	子どもは	本当に	賢い	子供だ。

他に (TⅢ2: 213, 38), (GR 1571)

形容詞

tene	wari-sa- ni	seeGang-ge ii-gun- a. (TⅢ2: 215, 35)
tenu	形過	saihan 形未 A
彼が	し たことは	良い。

他に (TⅢ2: 216, 1)

否定

存在の否定

nies'-dz'in	So-ngge-da	ugua. (GR 139)
nesi- 形現	xa/uu	gua
飛 ぶ	鳥	も いない。

属性の否定

ts'i	Glong -ne	rAngka	adie-ngge	bs'ia. (GR 1542)
qi	属	ranka	aadee	b/puxii
あなたは	ゲロン の	普通の	老人	ではありません。

変化

bieri-na	s'iera- ni-ngge	mburE-wa	Ge-lGa-dz'i-a. (GR 1905)
bee 再		分	終過 A
体 を	イタチに	変え て	日なたぼっこした。

他に (GR 2390, 2638)

呼びかけ

tSi	sbaawaG-ge (TⅢ2: 213, 35)
qi	sbaawag
	蛙よ！

罵倒

doGlong	funige-ngge! (TⅢ4: 233, 13)
doglong	funige
びっこの	狐め！

疑問

nudu-naa ide- sa yamatigii-ngge? (TⅢ1: 210, 1)  
 nudu 再 (i)de- 仮  
 目を 食べて どうですか。

他に (TⅢ2: 214, 19), (TⅢ2: 215, 27-28), (GR 88)

5. 複数の概念を表す語に付いている例

-ngge は単数を表すという記述がある一方で、明らかに複数の概念を表す語に -ngge が付いている例が見られる。全体として数はそんなに多くないので、得られた例をすべて書き出してみることにする。複数でも「それぞれ」という意味をもっていると思われる場合（個別的）もあれば、集合的な意味を持っている場合もある。

個別的

bu ta-ngula -ne maxa-ne-ngge ide- la re- wa. (TⅢ10: 287, 10)  
 bu tangula 属 maha 対 (i)de-目 (i)re-終過  
 私は おまえたちの 肉 を 食いに 来 た。

buda-ngula-ne-ngge bii ide. (TⅢ10: 287, 15)  
 budangula 対 bii (i)de-  
 私たち を 食べないでください。

bu malang ta-ngula -ne tSise-ne-ngge uutSi-la re- gi! (TⅢ10: 287, 17-18)  
 bu malang tangula 属 qis/zi対 uqi- 目 (i)re- 三人称命令  
 私を 明日 おまえたちの 血 を 飲み に 来させろ。

— ne ken tSiGaraa-n- a! — g- aa deeran roG-de-ngge udZe-sam ba xa, yama-da  
 ne ken 終現 A gi-分 deeren rog 与 uje-形過 助 助 yama  
 「これは 誰が 叫んだんだろう」 と 四 方 を 見る と 何 も

sge-dZi uguui ii-gun- a. (TⅢ2: 214, 13-14)

sge-結 gui 形未 A  
 見え なかった。

ndZieen aase Gueelo-ngge dulaa re- ya. (TⅢ2: 215, 10-11).  
 njeen aasi ghailo dulaa- (i)re-意  
 自分は 牛を 二頭共 放牧して きます。

ta Gurala -ngge biesE. (GR 860)  
 ta ghuraanla beesi-  
 おまえたち 三人とも 喜べ。

集合的

taada-gu kun-sge-de-naa-ngge saGa- dzi ii-gun- a xa. (TⅢ8: 276, 30)

taada kun 復 与 再 s(za)gha-結 形未 A 助

近く の 人 に 尋ね た。

kidixaang-ge kung-ge SdZu-naa kurg- aa re- dZi ii-gun- a. (TⅢ2: 218, 16-17)

kidihaange kun xjun 再 kurgha-分 (i)re- 結 形未 A

数人の 人が 娘 を 連れ て 来る。

di ama ts'i nda dz'iu-na Guran gAndzeng-ge Guo. (GR 1788)

amaa qi ndaa juu 再 ghuran ganzi (u)gho-

お母さん あなたは 私に 針 を 三 本 ください。

asE doola-dzin bulie -nggE sgee- dzi- a. miengxang-gE asE doola-n- a  
aasi 形現 bula/ii sge- 終過 A menhen aasi 終現 A  
牛の 番をしている 子供を 見た。 千頭の 牛の 番をしていた。

(XM 242)

Guran dooluon-gee (VM II 63)

ghuran doloon

三 週間

guor-gE (VM II 610, 617)

ghoor

(枝が) 二本

— tSi Iii SdZu-naa uGuu- sa, ndZieen nige ger-ge-sge-ne Siraa- waanu,

qi (I)ii xjun 再 (u)gho- 仮 njeen nige ger 複 対 xiraa 結

「おまえが 娘 を くれなければ、自分は 家 を 燃やして

funise -de boliiGa-nu ii. (TⅢ2: 217, 30-31)

funees/zi 与 bologha-結

灰 に してしまうぞ。」

個別的な場合は一つ一つは単数と言えなくもないが、集合的な場合はどう考えても単数とは言い難い。

## 6. -ngge の位置

Тодаева (1973: 44-45) には、-ngge が固定した位置を持たず、あるときは語幹に従属し、あるときは再帰あるいは人称語尾を伴った格語尾に従属するという記述が見られる。すなわち、語幹 + ngge + (格語尾 + (再帰／人称語尾)) または語幹 + (格語尾 + (再帰／人称語尾)) + ngge の両方の位置があるという指摘である。しかしこの両者の意味上の違いについては何の言及もない。しか

し、そもそも -ngge が Тодаева の言うように単数を表すのであれば、語幹に直接付加されるのが当たり前であり、格標識に後続することなど決してありえないはずである。このことだけ見ても、-ngge が単数を表すという記述は不自然であると言わざるをえない。事実、複数を表す形式はすべて格標識に前置している。また形態素の付加する順序が自由であるなどということは、通常ありえないことである。言語形式が異なれば必ず意味の違いが存在すると思うのが自然である。この点を吟味するために、テキストからこれら両者の例をすべて集めて意味の観点から分類してみた。結果は次のようである。

	-ngge + 格	格 + -ngge
属格		
所有		○（人称代名詞） (TⅢ8: 276, 15, 16, 17, 18)
関係	○ (TⅡ: 196, 10)	○（人称代名詞） (TⅢ8: 276, 19) ○ (TⅡ: 190, 2) ○ (TⅡ: 191, 3-4)
属格+場所名詞	○ (TⅡ: 195, 10-12) (TⅢ1: 209, 31-32) (TⅢ2: 216, 4) (TⅢ6: 243, 12-13) (TⅢ6: 251, 2-3) (GR 1826, 1836)	
対格	○(三項以上の文) (TⅡ: 195, 10-12) (TⅡ: 195, 20) (TⅢ1: 211, 13) (TⅢ8: 258, 3-4, 6-7)	○(二項文) (TⅢ1, 210, 9-10) (TⅢ2, 220, 25-26) (TⅢ5, 238, 25) (MⅡ 18, 20) (MⅣ 32) (XM 160, 204, 288) (GR 234, 1065, 1087, 1715, 1849, 1371)
与位格		
受益者		○ (TⅢ7: 250, 17) (GR 1370)
使役	○ (TⅢ2: 216, 8-9)	
場所		○ (GR 740)
方向	○ (TⅢ2: 219, 18-19)	○ (TⅢ2: 214, 14)

動作主の位置		(GR 1239, 1370, 1392, 1399)
	○	
存在する場所	○	(TⅢ: 189, 3)
	(TⅢ3: 230, 19)	
時	○	
	(TⅢ2: 213, 22)	
用件		○
		(TⅢ2: 216, 14)
与位格+再帰格 被伝達者	○	
	(TⅢ10: 288, 16)	
	(GR 1450)	
「心」		○
		(TⅢ9: 274, 21)
		(TⅢ9: 275, 4)
造格		(GR 2143)
材料	○	
	(TⅡ: 195, 10-12)	
道具	(MⅣ 66)	
	○	
	(TⅡ2: 213, 23-24)	
	(TⅢ4: 234, 3-4)	
造格+再帰格 手段		○
		(GR 1530)
奪格		○
動詞の格支配		(TⅡ: 191, 20)
起点		○
		(TⅡ: 188, 36)
		(GR 1143)
位格		
場所	○	
	(GR 1775)	
位格+再帰格		○
		(TⅢ2: 214, 27)
位格+奪格+再帰格 起点		○
		(GR 1143)
共同格	○	
	(TⅢ8, 262, 25)	

再帰格	○ (TⅢ1, 211, 1-2)  (GR 1998, 2435)	○ (TⅢ2: 217, 24, 26, 38) (MⅣ 14) (GR 1066, 1241, 1769, 1898, 1950, 1961, 2013, 2027)
所有	○ (TⅢ8, 257, 28)	○ (MⅡ 35, 40) (XM 193)
ni		○ (TⅡ: 190, 31, 33) (MⅢ 6) (GR 294)

名詞の属格＋場所を表す名詞の形式では圧倒的に -ngge が属格に前置するほうが多い。訳文だけを示す。下線の部分に -ngge が付いている。

ふすまの瓶の中に赤い箸を入れ、赤い布で瓶を巻き、その子供と一緒に置く。

(TⅡ: 195, 10-12)

逃げて崖の麓にやってきて、日なたぼっこし、飴を食べていた。(TⅢ1: 209, 31-32)

下の村のお爺さんの家へ行ってください。(TⅢ2: 216, 4)

水をいっぱい貯めた大きな穴のある石の所で大きな木を燃やして、水が溢れていた。

(TⅢ6: 243, 12-13)

橋の頭にやって来て、橋を分けて行った。(TⅢ6: 251, 2-3)

大きな木の所へやって来た。(GR 1826)

岩の凹地の中で (GR 1836)

一方人称代名詞の属格が用いられる場合には -ngge が属格に後置する（8. 7を参照）。また、二項文における対格はすべて -ngge に前置されている。一方三項以上の文における対格はすべて -ngge に後置している。

二項文とは「主語＋目的語＋動詞」のように動詞が二つの名詞句を支配している文であり、次のような文である。

あなたは 自分(私)の目も 掘ってください。(TⅢ1: 210, 9-10)

彼を 見ても 美しくなれない。(TⅢ2: 220, 25-26)

錐が 後ろを 突いた。(TⅢ5: 238, 25)

ゲロンを 統治しに 行けば (GR 1371)

三項以上の文とは次の例のように、いわゆる主語、目的語以外に最低一つの名詞句を動詞が支配している文であり、使役文もこの中に含まれる。

ふすまの瓶の中に 赤い箸を 入れ (TⅡ: 195, 10-12)

新しい妻の前に 二人の女が 白いフェルトを 引く。(TⅡ: 195, 20)

木を 口で 座った。(木に 口で 捕まった。)(TⅢ1: 211, 13)

悪い子供を 自分の子供といっしょに 牛を 放牧させた。(TⅢ8: 258, 3-4)

娘に 小型家畜を 下の平らな平原で 放牧させた。(TⅢ8: 258, 6-7)

属格と対格以外の格については全体として例があまりにも少ないため、意味上の区別に対応して -ngge の位置の違いが存在するという確かな結論を引き出すことは不可能である。

これに対し、話者の違いによる -ngge の位置の違い(好み)は確認できる。Schröder のテキストと Тодаева のテキストに分けてみると、次のようになる。比較的用例の多い対格の場合について、Schröder のテキストと Тодаева のテキストとで、語順に顕著な差がみられる。Schröder のテキストでは、常に -ngge の前に現れるが、Тодаева のテキストでは -ngge の前にも後にも現れる。これが方言差を表しているという断定はできないが、少なくとも個人語の差異を表しているということはいえよう。一般的に Schröder のテキストでは、格が -ngge の前に来るのを好む傾向があるといえる。Тодаева の Xalci gol 方言のテキストに何人の話者が関与しているのかわからないが、複数の話者が関与していると思われるふしがある。

## 7. 文体の違いによる -ngge の現れ方

次に文体の違いによる -ngge の現れ方について検討してみよう。土族語には書きことばは存在しないので、テキストの文体はすべて話しことばである。話しことばの中身は会話体と報告体とに分けることが可能かもしれない。しかしここで大事な分類は、韻文か散文かという分類である。テキストの中には非常に長い叙事詩が含まれているし、歌詞の部分もある。もっとも韻文の定義がはっきりしているわけではない。土族語の詩は頭韻も脚韻も踏まないし、各行の音節もモーラも(その他考えるあらゆるリズム単位も)一定ではない。しかし、一行当りの語数や音節数はある数値以下でも以上でもないし、そのばらつきがとてつもなく大きいことはない。それに対し、散文のほうはこの一定ではない度合いが韻文よりもはるかに大きい。実はこの点にしか韻文と散文の違いは求められない<sup>5)</sup>。諺は対句のものが多いため韻文とした。以下各テキストに用いられている -ngge を品詞別に分類してみた。この表で固有名詞は名詞にいてある。数詞のうちで副詞的な用法のものは副詞に入れた。

		文体	名	代	形	副	動	疑	数	その他
Schröder (1959)										
VM I										
Xoni	羊	韻	0	1	0	0	9	0	1	1
MI	マンガス		12	0	0	1	0	0	0	0
MII	マンガス		9	0	0	0	0	0	0	0
MIII	マンガス		9	0	0	1	0	0	0	0
MIV	マンガス		11	3	0	0	0	0	0	0
XM	黒馬		35	2	0	11	0	0	1	4
SI	賛美歌	韻	0	0	0	0	0	0	0	0



土族語（モンゴル語）における接尾辞 -ngge について

II	賛美歌	韻	0	0	0	0	0	0	0	0
B	子牛	韻	1	0	0	0	0	0	0	0
SN	鴨のつがい	韻	2	0	0	0	0	0	0	0
G	チベット, 中国, アムド	韻	0	0	0	0	0	0	0	0
A	オウム, クジャク, カッコウ	韻	1	0	0	0	0	0	0	0
F	農作業	韻	0	0	0	0	0	0	0	0
Sch	火酒	韻	0	0	0	0	0	0	0	0
W	織機	韻	0	0	0	0	0	0	0	0
Br	Brot dampfen	韻	0	0	0	0	0	0	0	0
Xue	格言と比喩		0	0	0	0	0	0	0	0
Schröder (1970)										
VM II	神話	韻	14	1	0	22	2	0	2	9
Schröder (1980)										
GR	ゲセル大王物語	韻	132	6	7	39	30	1	2	29
Тодаева (1973)										
T I	諺	韻	4	0	0	2	0	0	0	0
T II	結婚	散	21	0	0	0	0	0	0	0
		韻	14	1	1	4	17	1	0	3
T III 1	狼と兎		17	0	0	2	0	1	0	0
T III 2	蛙		44	1	3	5	1	4	2	0
T III 3	賢い子供		9	0	0	0	0	0	0	0
T III 4	兎		10	0	0	3	1	0	0	0
T III 5	マンガス		31	0	0	0	0	0	0	0
T III 6	古代人		13	0	0	3	0	1	0	3
T III 7	妻		33	0	0	3	0	1	0	3
T III 8	ラレンボとチメンソ	散	16	0	0	5	0	1	0	4
		韻	0	0	0	1	0	0	0	0
T III 9	白い皇帝と黒い皇帝		22	6	2	0	0	2	0	1
T III 10	黒い馬		39	1	1	8	0	1	0	2
T III 11	シャランゴル (民話方言)		0	0	0	0	0	0	0	0
T IV	タブー		3	0	0	0	1	0	0	0
	会話文 (互助方言)		0	0	0	0	0	0	0	0
	(民話方言)		0	0	0	0	0	0	0	0
		文体	名	代	形	副	動	疑	数	その他

一見してわかることは韻文には -ngge の使用が少ないということである。「羊」のように動詞（副動詞）に集中していて名詞にはまったく現れないものもある。「神話」も副詞の用法が名詞の用法より多い。「ゲセル大王物語」は長大な叙事詩であるが、名詞の用法が多いという点では散文と韻文の中間的な性質を持っているといえるかもしれない。散文では圧倒的に名詞の用法が多い。これは後述するように、初出語に -ngge が付くという特徴を物語っている。ある特定の語に繰り返し -ngge が付くことがある。「結婚」の韻文部分（歌の部分）に比較的名詞の用法が多いのはこのためである。

de Smedt et Mostaert の記述が副詞の用法に限定されているのは、あるいは文体差を表しているのかもしれない。土族語の -ngge の用法を見ていると、モンゴル語の л の用法と共通したものを感じとることができる。モンゴル語の л も各種の品詞に付加しうるが、書きことばでは副詞の後に限られるようである。

## 8. 談話から見た -ngge

以下、主として名詞に付いた場合について談話の観点から考察することにする。

### 8.1. 物が列挙されている場合

「結婚」には物が列挙されている箇所がいくつかあるが、これらの例を見ていると、-ngge が付いている名詞と付いていない名詞とがあり、その付きかたにいくつかのタイプがあることがわかる。次の例は、単数の限定された名詞だけに -ngge が付いている。

dee Sdime	Goor	tawaG,	deraase	longxu	Guraan,	[tolGuee-re-gu	dzangri-ne-ni
	ghoor	tawag	duraasi	longho	ghuran	tolghoi	位 属
饅頭	二	皿,	酒	瓶	三本,	頭	飾り の

  

Song	Sdi-dee	sam] -ge,	[fulaan	tuSeng]	-ge,	botuu,	diel	abu-dZi
xong	shdi	sam/n	fulaan				deel	awu-結
偶数の	歯の付いた	櫛,	赤い	髪用の編み紐,		頭カバー,	服を	持って

SdZi- n- a. (TII: 188, 11-13)

xji 終現 A

行く。

次の例も初出の限定された単数名詞だけに -ngge が付いているが、「赤い糸と緑の紙」という部分の全体に -ngge が付いている。

warwa,	Gadem	kun re- gulaa	Sdime	Guraan	tawaG,	deraase	longxu
warwa	ghadim/n	kun (i)re-		ghuran	tawag	duraasi	longho
仲人と	親戚の	人が来るまでに	饅頭を	三	皿,	酒	瓶を

  

Goor,	tSaa	awu-dZi	SdZi- n- a.	basa	deeran	bos,	bos	dere	[fulaan
ghoor	qaa	awu-結	xji- 終現 A		deeran	bos	bos	dire	fulaan
二本,	お茶を持って	行く。		また	四反の	布,	布の	上に	赤い

  

Sdaadze,	noGoon	tSaaldze]	-ngge	boolGa- n- a. (TII: 187, 21-24)
shdaaz/si	nu/oghoon	qaalz/si		boolgha-終現 A
糸と	緑の	紙を		巻く。

同じような例であるが、次の場合は「草の袋」と「白いフェルト」のそれぞれに付いている。

mori	dere	xongGuor-mangge	boo-Gaa,	imiel	dere-ni	[wese	fuuda]	-ngge,
mori	dire	hongghor 複	boo-分	imel	dire	wesi	fuuda	
馬の	上に	鈴 等を	結び	鞍の	上に	草の	袋と	

[tSiGaan sgee] -ngge tee- n- a. (T II: 188, 8-9)  
 qighaan tai- 終現 A  
 白い フェルトを 置く。

初出名詞がたくさん現れる文でも、限定されていないときは -ngge が付いていない。

te	nige	re- gun- sa	meSe	xoni	ala- n- a,	sandze,	boordzoG
te	nige	(i)re-形未 奪	muxi	honi	ala- 終現 A		boorzog
その	一人が	来る	までに	羊を	殺す。	サンゼ,	ボオルツォックを

tSina- n- a, deraase nire- n- a. (T II: 188, 2-3)  
 qinaa-終現 A duraasi nire- 終現 A  
 煮る 酒を 蒸留する

次の例では、初出名詞に -ngge が付いたり付かなかったりする。「赤い箸」、「白い羊毛」、「ネズの枝」には -ngge が付いていない。

Sirree	dere	sbee,	lamar-ge,	tSugor-ge	nige	yaGa,	fulaan	Siur
xiree	dire	sbai	lamar		nige	i/yagha	fulaan	xuur
机の	上に	大麦,	燈明	水で薄めた乳	一	杯	赤い	箸

nige	ayaG,	GuidZia-ngge	gee-dZ- a,	tSugor	dere	tSiGan
nige	i/yagha	hoiqaa	gee-終過 A		dire	qighaan
一	本	経典を	置く。	水で薄めた乳の	上に	白い

ngGuaase, SuGuo, (sic.) reGa gee-dZ- a. (T II: 190, 31-33)  
 (n)ghuasi raalgha gee-終過 A  
 羊毛 ネズの 枝を 置く。

次の例も同様に「大きな机」には -ngge が付いていない。

meSe-ni	ger-de	[Sge	Sirree]	gee-dzi,	Sdime	Gor	tawaG,	sandZe	Gor
muxi	ger 与	shge	xiree	gee-結		ghoor	tawag		goor
その前に	家に	大きな	机を	置き,	饅頭	二	皿,	サンゼ	二

tawaG	gee-dZi,	[fulaan Siur] -ge	daala-n- a. (T II: 195, 13-14)
tawag	gee-結	fulaan xuur	daala-終現 A
皿	置き,	赤い 箸を	置く。

## 8.2. 既出名詞

既出名詞には -ngge は付かないという特徴がある。次の文で「ふすま」と「子供」は既出である。また初出の「瓶」には付いているが、二回目に現れる「瓶」には付いていない。

kayag	-ra	longxu-ngge-ne	turo	[fulaan	Siur]	-ge-ne	dzeel-aanu,	[fulaan
kay/wag	位	longho	属	tu/oro	fulaan	xuur	対	分
ふすま	の	瓶	の	中に	赤い	箸	を	入れ
								赤い

bos]	-ge-la	longxu-ne	fur-aanu,	[te-ne	bulee]	-ne	kamade	gee-n-	a.
bos	造	longho	対	furo-	分	te	属	bula/ii	属
布	で	瓶	を	巻き	その	子供	と	いっしょに	置く。

(TII: 195, 10-12)

## 8.3. 限定された語

次の例は「古代人」の冒頭の部分を訳出したものである。下線の語に -ngge が付いている。(ni) は -ni が付いた名詞句を表す。(2)の「お爺さんとお婆さん」, 「子供」は話に初めて登場する名詞であり, -ngge が付いている。しかし(4)の「石」は初めて登場するのにもかかわらず, -ngge が付いていない。その代わり(5)の「そのような石」に付いている。また「水」は(7)(8)で現れるのに -ngge は付かないで, (9)の「きれいな水」で初めて付いている。いずれも限定された名詞という特徴がある。

- (1) 昔地球ができた頃, 人は何も知らなかった。
- (2) ある村のお爺さんとお婆さんに子供があった。(登場)
- (3) 子供 (ni) は賢かった。
- (4) ある日 (ni) 子供は外へ遊びに行き, 山に登り, 石の上で遊んだ。石の穴の中に水がいっぱいになっていた。
- (5) 子供は家に帰って来て父と母に「山の石の穴の中に水がいっぱい貯っています。数日間行きませんでした。私たちが家にそのような石を拾って来れば, 私たちは走って泉の水を飲みに行く必要はありません。」と行った。
- (中略)
- (6) 父母 (ni) は返事をしてくれなかった。子供は喜ばず, 入口の前に碗を置いた。
- (7) 日が一, 二日照り, 乾燥していった。雨が降って水がいっぱい貯った。
- (8) 子供は父母に, 「二人とも見に来てください。私の碗に水がいっぱい貯りました。」と言った。
- (9) 父母 (ni) がちょっと見ると, きれいな水がいっぱい貯っていた。飲んでみると水はおいしかった。

(以下略) (TIII6 「古代人」より)

#### 8.4. 話者交替

次の例では「息子」及び「何」に繰り返し -ngge が付いている。(1)の「息子」は初めて登場するから付いているのである。これは描写文である。(2)から(5)に会話文が現れるが、話者が交替するたびに -ngge が付くことがわかる。

(1) 黒い皇帝の妻は息子を産んだ。(登場)

(2) 黒い皇帝は喜んで白い皇帝に尋ねに行った。「白い皇帝さん、白い皇帝さん、あなたの奥さんは何を産んだんですか。」

(黒い皇帝→白い皇帝)

(3) 白い皇帝は、「あなたの奥さんは何を産んだんですか。」と逆に尋ねた。

(白い皇帝→黒い皇帝)

(4) 黒い皇帝は、「私の妻は息子を産みました。」と言った。

(黒い皇帝→白い皇帝)

(5) そこで (ni) 白い皇帝は、「私の妻も息子を産みました。」と言った。

(白い皇帝→黒い皇帝)

(TⅢ9: 273, 18-26「白い皇帝と黒い皇帝」より)

GR には Sdenglats'in sang の三人娘が夢を見て aka という老人に占ってもらう場面が三回現れる。夢に出てくる名詞に -ngge が付いているかどうかを表にすると次のようになる。叙述というのは GR の語り手が聞き手に語っている部分、娘→老人というのは三人娘が、それぞれ夢の内容を老人に話している部分、老人→娘というのは、老人が話の内容を確認している部分（これは独り言ともとれるし、娘たちに向けて語っている事柄ともとれる）である。数字はその文が現れる通し番号を表す。

	夢の内容	叙述		娘→老人	老人→娘
1	長女 熊の手	-ngge 250		-ngge 264	Ø 270
	次女 筆と墨	-ngge 253		-ngge 265	Ø 271
	三女 銀の杖	-ngge 256		-ngge 266	Ø 271
2	長女 赤い花	-ngge 279		-ngge 300	-ngge 315
	次女 大きな木	-ngge 282		-ngge 304	Ø 319
	三女 大きな松	-ngge 285		-ngge 308	-ngge 323
3	長女 黄色い霧	Ø 332			Ø 451
	次女 青い霧	Ø 335			Ø 455
	三女 白い霧	Ø 338			Ø 459

叙述と娘→老人とでは話者（語っている世界）が違っているため一回目と二回目では -ngge が付いている。一方、老人にとっては既出になるので -ngge が付いたり付かなかったりしている。3回目になると、夢を見ること自体がとくに新しい情報をもたらさないのに -ngge は付いていない。

### 8.5. 話題, 主題変換

既出の名詞を主題が変わったとき, -ngge でマークすることがある。(2)の「父」に -ngge が付いていないのは, (1)の「人」のうちの一人だからであろう。(3)で話題が変わり, -ngge が付いている。(5)の「子供」と(6)の「お爺さん」は初出ではない。主題変換のために -ngge が付いている。(7)以後は話者が変わっても -ngge は付かない。

- (1) 人が二人いた。子供がいたが, 非常に馬鹿だった。嫁をもらおうとしても, 誰も娘をくれなかった。(登場)
- (2) 「今この子に嫁をもらわなければ」と父 (ni) は悲しんでいた。
- (3) この日 (ni), 父は「牛を売りに行かなければならない。」と子供に行かせた。(主題変換)  
(TⅢ7: 246, 15-19「妻」より)  
(中略)
- (4) 道の途中に (ni) 小さな村があった。お爺さんが入口の前で糸を紡いでいた。(登場)
- (5) 子供は悲しくなり, 羊を追って行った。(主題変換)
- (6) お爺さんが見て, 「坊や, 羊を追ってどこへ行くんだね。」と尋ねた。(主題変換)
- (7) 子供は, 「私は羊を売ります。」と言った。
- (8) お爺さんが, 「いくらで売るのが。」と言うと,
- (9) 子供は, 「百セールで売ります。」と言った。
- (10) お爺さんは, 「それなら私に売ってくれ。」と言って家に連れて行き, 百セール与えた。  
(TⅢ7: 246, 32-247, 7「妻より」)

### 8.6. 確認

次の例で(1)の「黒い煙」と「白い煙」は対比されているために -ngge が付いている。(2)で動作主が変わり, 「黒い煙」を確認している。

- (1) ラレンボは「さあ, 見ていなさい。明日朝早く川岸に行き, 自分(私)の家を見なさい。自分(私)の家から黒い煙が登っていたら, 自分(私)の命は絶え, 自分(私)の家から青い煙が登っていたら, 自分(私)は生きています。」と言った。(対比)
- (2) そうすると, チメンソは泣き泣き帰って行った。翌日 (ni) 朝早く川岸に来て見ると, 家から黒い煙が登っていた。(確認) (TⅢ8: 263, 22-29「ラレンボとチメンソ」より)

同様の例として, 次のような例がある。この場合, 動作主は同じである。(1)は心の中への登場, (2)は確認である。

- (1) こうしていると黒い皇帝は「これは娘だ。そうでなければ、どうして外へ出てこないんだろう。」と人々を呼んで入口を押し、入って行った。(登場)
- (2) 入って行くと、「本当だ。娘がいる。(以下略)」(確認)
- (TⅢ9: 276, 21-24「白い皇帝と黒い皇帝」より)

## 8.7. 繰り返し

繰り返し現れる語に -ngge が付くことがある。

娘は「私のお爺さんは白檀のマニ車を持って山に登って行きました。私のお婆さんは白檀の茎に寄りかかって、山を見に登って行きました。私の父は犁(スキ)により掛けて土地を耕しに出かけました。私の母は槌を担いで土地を打ちに出かけました。私の家には誰もいません。」と言った。

(TⅢ9: 276, 15-20「白い皇帝と黒い皇帝」より)

GR では「ゲロン」(ゲセル物語の舞台となっている地名、リンの土族語形)に -ngge が付いている例が23回ある。

## 9. -ngge/-ni/Ø<sup>6)</sup>

XM「黒い馬」の中で、マンガスが娘たちの血を吸いに四回現れるが、そのとき用いられている形式がどうなっているかを「血」と「肉」という二つの語に焦点を当てて見てみよう。次の表は、1, 3, 5, 7, 9, 10, 12の「肉を食おうか、血を飲もうか。」、2, 4, 6, 8の「肉を食べないでください。血を飲んでください。」11, 13の「肉を食うなら食え、血を飲むなら飲め。」という文の中で「肉」と「血」に -ngge, -ni, Ø のうちのどの形式が用いられているかを示したものである。

5, 6, 9は、事態を目撃していた「石」と「木」がそれぞれ3, 4, 7の内容を報告したものである。また10, 11は「馬」から娘たちへの指示である。13は指示を忠実に伝えたものである。なお、\*は否定文であることを表す。

	話し手→聞き手	聞き手→話し手	肉	血	通し番号
1					
1	マンガス→娘		-ni	-ni	170
2	娘→マンガス		-ni*	-ni	172
2					
3	マンガス→娘		-ni	-ni	182
4	娘→マンガス		-ngge*	-ngge	183
5	石→馬, 木	マンガス→娘	-ni	-ni	194
6	石→馬, 木	娘→マンガス	-ni*	-ni	196
3					
7	マンガス→娘		-ni	-ni	202

8	娘→マンガス		-ni*	-ngge	204
9	木→馬, 石	マンガス→娘	Ø	Ø	211
4					
10	馬→娘	マンガス→娘	Ø	-ni	221
11	馬→娘	娘→マンガス	-ni	-ni	222, 223
5					
12	マンガス→娘		-ni	-ni	226
13	娘→マンガス		-ni	-ni	228

マンガスから娘たちへは、「肉」にも「血」にも -ni が付いている同じ形式で四回とも問いが発せられているのに対して (1, 3, 7, 12), 娘たちからマンガスへの返事は三回とも (2, 4, 8) 違った形式になっている。また 5, 6, 9 はそれぞれ 3, 4, 7 の内容を反復したものであるが, 同じ形式を用いて聞いたとおり, 反復しているのは 5 だけである。13 は 11 の指示を言葉とおり反復している。「肉」と「血」に同じ形式が付いているものが 13 例中 11 あるということは注目に値するものと思われる。

#### 10. 同じモチーフの話におけるバリエーション

Schröder のテキストと Тодаева のテキストには同じ内容の話が三つある。MI の「マンガス」と TⅢ5 の「マンガス」, XM の「黒い馬」と TⅢ10 の「黒い馬」, SN「鴨のつがい」と TⅢ8「ラレンボとチメンソ」がそうである。この三つの話のうちで -ngge の付いた名詞が比較的豊富に現れるのは前者の二つである。MI と TⅢ5 では登場するものが微妙に異なるが<sup>7)</sup>, ダグールの「紙人形姉さん」<sup>8)</sup> や日本の「猿蟹」と同じモチーフの話である。話し手の脚色のしかたの違いのために一方では登場するものが他方では登場しないことがある。両方に共通して登場する名詞が, 初出の際に -ngge という形式を伴っているかないかを示すと, 次のようになる。

MI (マンガス)		TⅢ5 (マンガス)	
お婆さん	-ngge	お婆さん	-ngge
饅頭	-ngge	バター付きの饅頭	-ngge
マンガス婆さん	Ø	マンガス婆さん	-ngge
牛糞	-ni	糞	-ngge
蛙	-nE	蛙	-ngge
卵	-nE	卵	-ngge
車軸	-nE	車軸	-ngge
はさみ	-nE	はさみ	Ø
頬	Ø	頬	-ni
目	-ngge	目	-ni

この話の主人公である「マンガス婆さん」には MI では -ngge が付いていない。また, 「(牛) 糞」, 「蛙」, 「卵」, 「車軸」, 「はさみ」等のマンガス婆さんを退治するときにお婆さんを手助けしてくれ



るものが、MI では初出の際に -ngge が全く付いていないのに、TⅢ5 では殆ど付いている。なお「頬」、「目」はマンガス婆さんの頬や目である。MI を見る限り、初出名詞に -ngge が付くとはいえない。しかし（牛）糞，蛙，卵，車軸，はさみがお婆さんに要求する「（バター付きの）饅頭」には，MI，TⅢ5 共に，話者が変わる度に -ngge が付いている。

XM の「黒い馬」と TⅢ10 の「黒い馬」にはもう少し共通点が見られる。

XM（黒い馬）		TⅢ10（黒い馬）	
お爺さん	-ngge	お婆さん	-ngge
黒い馬	-ngge	黒い馬	Ø
腹	-ngge	胃	-ngge
黒い子馬	-ngge	子馬	-ngge
炒麦	-ngge	炒麦	-ngge
弓と矢	-ngge	弓と矢	-ngge
木	-ngge	木	-ngge
人	-ngge	人	-ngge
石	-ngge	大きな石	-ngge
鳩（三羽）	Ø	鳩（三羽）	Ø
美しい娘	-ngge	（一番）美しい娘	-ngge
食べ物	-ni	飲物	-ngge
食べ物	-ngge	おいしい飲物	-ngge
猫	-ngge	猫	再帰
炒麦	-ngge	飲物	-ni
青い煙	-ngge	煙	-ngge
暗い穴	-ngge	暗い穴	-ngge
マンガス婆さん	Ø	マンガス婆さん	-ngge
火	-ngge	火	-ngge
肉	-ngge	肉	-ngge
血	-ngge	血	-ngge
牛の番をしている子供	-ngge	子供	-ngge
牛の舌	-ni	牛の舌	-ngge
乳皮バター	Ø	飲物	-ngge
犬の舌	-ni	犬の舌	-ngge

## 11. おわりに

土族語の -ngge は動詞の終止形，命令形，意志形，文末助詞，否定辞以外のほとんどの品詞に付加し，意味的にもさまざまな機能を有する。複数を表す概念にも付きうることから，従来言われているように単数を表すとはとうていいえない。格語尾等との語順（形態素順）も必ずしも自由だとはいえない。韻文では名詞につく例が少なく副詞に付く例が多い。談話の観点から見ると，名詞に付く -ngge は初出をマークする機能を有するものと思われるが，すべての初出名詞が -ngge でマークされているわけではなく，限定された名詞にしか付いていないこともある。話者，話題，主

題などが変わったときや、確認したときに付くという機能もある。また、繰り返し同じ語に付くという場合もある。しかし、-ngge を付けるか付けないかは、話者に委ねられる面がたぶんであり、同じモチーフの話でも語り手が違えば、-ngge も付き方も違ってくる<sup>9)</sup>。

## 註

- 1) 普通 -ngge は母音語幹に付き -ge は子音語幹に付くが、daGmu daGmu-ge 「詳しく」(VM II 545) のように母音語幹に -ge が付いていることもある。また sgil-ge (XM 323) ~ sgila-ngge (B 99) 「心」、dil-ge (GR 518) ~ diele-ngge (GR 1716), diela-ngge (GR 1777) 「服」のような興味深い形もある。
- 2) 「鼠ともぐら」は鼠ともぐらが尻尾と目を取り替えて、その結果もぐらが目が見えなくなるという話であるが、「尻尾」という語に二回 -ge が付いている。「目」に付いていないのは、複数だからであろうか。「ジェメゲンデン」には名詞、形容詞に -ge が付いた例が十語24回現れる。形容詞は一例をのぞいて限定的用法である。kun-ge-de 「人に」、nedong-de-ge 「目に」のように、与位格が -ge に後置している場合と前置している場合とある。
- 3) テキスト本文は引用する際、簡略化した表記を用いる。この表記については角道 (1987 a) を参照されたい。自由形式は『土漠対象詞彙』の表記を、付属形式、付属語については、文法形式を弁別するために以下に述べる記号を付記する。  
複 (複数), 属 (属格), 対 (対格), 位 (位格), 与 (与位格), 奪 (奪格), 造 (造格), 再 (再帰格), 使 (使役), 形過 (形動詞過去), 形現 (形動詞現在), 形未 (形動詞未来), 終過 (終止形過去), 終現 (終止形現在), 終未 (終止形未来), I (主観範疇), A (客観範疇), 命 (命令), 意 (意志), 非 (非分離副動詞), 結 (結合副動詞), 分 (分離副動詞), 仮 (仮定副動詞), 目 (目的副動詞), 助 (助詞)。出典の表記については角道 (1989) を参照のこと。
- 4) 互助方言内部での下位方言間の差異は決して小さいとはいえない。照那斯圖の記述している東溝方言, Тодаева の記述している Xalci gol 方言, Schröder の記述している Xalci gol 方言と Narin gol 方言の中間の方言, de Smedt et Mostaert の記述している Narin gol 方言の四方言間には例えば次のような形態素の違いがある。

	位格	形動詞過去	假定	造格	三人称命令
(1) 照那斯圖					
東溝方言	なし	-san	-sa	-la	-(la)ge
(2) Тодаева					
Xalci gol 方言	-ra	-san	-sa	-la	-(lax)ge
(3) Schröder	-rE	-dzan	-dza	-la	-lagE
(4) de Smeda et Mostaert					
Narin gol 方言	-re	-dzan	-dza	-ra	-ragi

(4) の方言は音節末で l でなく r が現れるという特徴を有することで注目に値する方言であるが、ある種の形態素には音節の初めでも l でなく r が現れることがある。この方言では位格と造格は母音の違いによって区別される。方言(3)は方言(4)に近いが音節の初めの l は r にならない。方言(2)は方言(1)に近いが位格、三人称命令の点で違いがある。なお方言(1)(2)(4)における音韻上の差異については角道 (1987 a) を、(3)の GR のバリエーションについては角道 (1988a, b) を参照されたい。

- 5) 例えば, SN 「鴨のつがい」の81行について, 1 行当りの音節数を単語単位で数えてみると次のように分布している。

1 行の音節数	各語の音節数				行数
5	1	2	2		1
7	2	2	3		37
	4		3		10
	1	3	3		2
	2	3	2		3
6	1	2	3		6
	2	1	3		2
	2	2	2		4
8	2	2	4		2
	4		4		1
	2	3	3		6
9	3	3	3		1
	2	3	3	1	1
10	2	3	2	3	1
	2	2	3	3	1
11	2	3	3	3	1
	2	2	2	2	
	3				1
12	2	3	2	3	
	2				1

1 行当りの語数は 2 語から 5 語まで分布しているが、3 語の行が 64 行 (79%) と最も多い。1 行当りの音節数は 7 音節の行が 52 行 (64%) と最も多い。8 音節以内の行が 74 行 (91%) ある。このことから「鴨のつがい」の基本的な韻律単位は |○○|○○|○○|○×| であると考えられ、字余りは 7 行 (8.6%) にすぎない。

- 6) -ngge が初出をマークする機能を有するのに対して、-ni は既出をマークする機能を有するといえる。-ngge と違って -ni は名詞、形動詞などいわゆる名詞相当語句にしか付かない。名詞だけに限定すれば、-ngge が不定冠詞的、-ni が定冠詞的な機能を持っているといえよう。
- 7) 登場する順番も違っている。MI 「マンガス」では、蛙、卵、車軸、布巾、牛糞、ネズ、はさみの順、T III5 「マンガス」では卵、錐、車軸、糞、はさみ、蛙の順である。
- 8) ダグールの「紙人形姉さん」については、角道 (1987b) を参照のこと。
- 9) 次の話は T III2 「狼と兎」の初めの部分であるが、「兎」と「商人」に -ngge が付く付きかたが十分には説明できない。(1)は登場であるから全く問題はない。(1)の「自分」は兎であるから、(2)で主題が変わっていると思われるのに「商人」には -ngge が付かないで「兎」のほうに付いている。あるいはこの話の語り手の心の中では既に「商人」に主題が移ってしまっていて(2)の「兎」が登場と解釈されているのかもしれない。(4)で主題が変わって「商人」に付いているのは理解できるが、(5)でも「商人」に付いている理由は十分には説明できない。
  - (1) 兎がいた。ある日商人に会った。会って自分はびっこをひいて歩いた。(登場)
  - (2) 商人は追いかけて兎を捕まえた。捕まえて箱の中に入れて運んで行った。
  - (3) 兎は箱の中で餌を食べた。食べて満腹すると耳にたくさん隠した。
  - (4) また、商人は少し歩いた。(主題変換)
  - (5) 商人が箱を開けてみたとき、兎が飛び出してきて逃げて行った。  
(以下略) (T III1 「狼と兎」より)

参考文献

- 布和, 劉照雄 (1982) 『保安語簡誌』民族出版社
- 哈斯巴特爾, 他編 (1985) 『土族語詞彙』内蒙古人民出版社
- 照那斯圖 (1981) 『土族語簡誌』民族出版社
- 互助土族自治県民族語文辯 (1982) 『土漢対照詞彙』互助土族自治県
- 
- 角道正佳 (1987a) 「土族語の下位方言」『大阪外国語大学學報』第75-1. 2号 49-63
- 角道正佳 (1987b) 「ダグールの口承文芸」『朔風』第2号 15-27
- 角道正佳 (1988a) 「Geser rëdzia-wu の言語—自由交替—」『大阪外国語大学學報』第76-1. 2号 25-50
- 角道正佳 (1988b) 「Geser rëdzia-wu の言語—分布—」『大阪外国語大学學報』第77号 23-44
- 角道正佳 (1989) 「モンゴール語 (土族語) の位格と与位格の用法について」『日本モンゴル学会紀要』No. 19, 30-39
- 
- Schröder, Dominik (1959) *Aus die Volksdichtung der Monguor*, 1. Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Schröder, Dominik (1964) 'Der Dialekt der Monguor,' *Mongolistik*, Leiden/Köln, E. J. Brill, 143-158.
- Schröder, Dominik (1970) *Aus die Volksdichtung der Monguor*, 2. Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Schröder, Dominik (1980) *Geser rëdzia-wu*, Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tujen)-Version des Geser Epos aus Amdo, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1964) *Le dialecte Monguor parlé par les mongoles du Kansou occidental*, 1<sup>re</sup> partie, Grammaire, Mouton & Co., The Hague.
- 
- Тодаева Б. Х. (1964) Баоаньский язык, Академия наука СССР.
- Тодаева Б. Х. (1973) Монгорский язык, издательство «наука» главная редакция восточной литература, Москва

1989年9月30日